明治期後半における日仏関係―パリ日仏協会を中心として―

パリ国際大学都市日本館図書室
司書　市川　義則

1　はじめに

現在、ソシエテ・フランコ・ジャポネーズ Société franco-japonaise（日本名、「日仏学会」もしくは「日仏協会」）と称する団体は、その性格からふたつに大別される。在日フランス大使館のホームページによれば[1]、1）東京の日仏会館を本拠とする約 25 を数える学術団体である「日仏（諸）学会」。2）各地に散在する 50 以上の友好親善を目的とした「日仏協会」。

今日行われている二国間交流の活動と比べて、ソシエテ・フランコ・ジャポネーズと称する団体が一世紀以上前から存在していることはあまり知られていない。まず 1900（明治 33）年 1 月 16 日に神戸のフランス公使ピエール・アンリ・リシャール・ド・リュシ・フォッサリウ（Pierre-Henri Richard de LUCY-FOSSARIEU）が、当時の兵庫県知事大森鐘一や川崎製鉄所の松方幸次郎といった地元有力者の助けを受けて神戸日仏協会を設立する。これについては当時フランスの一知識人の日本観に関する今橋映子の研究[2]のなかで言及がある。

そのド・リュシ・フォッサリウが同年フランスへ一時帰国した際に、パリで日仏両国人に働きかけて作られたのが本稿の主題であるパリ日仏協会（Société franco-japonaise de Paris）である。万国博覧会がパリで開催された年にあたり、設立は同年 9 月 16 日とされている。

なお東京には以前から教育・研究を主眼とした仏学会が 1886 年に作られており、紆余曲折を経て「明治 42［1909］年 4 月、仏学会は日仏協会と改称し、従来の学校経営を離れて、専ら日仏親善を目的とする社交団体」[3]となった。

---

[1] 2010 年 11 月 23 日検索
http://www.ambafrance-jp.org/spip.php?article2078,
http://www.ambafrance-jp.org/spip.php?article3769

[2] 今橋映子：一九〇〇年日仏文化交差史への新視界―ジョルジュ・ヴレルスの日本観，『パンテオン会雑誌』研究会編：『パリ一九〇〇年・日本人留学生の交遊』，ブリュッケ，2004 年，pp. 481-491.

[3] 故古市男爵記念事業会：『古市公威』，1937 年，pp. 290-291.

これら 20 世紀前半における各地の日仏協会について、筆者は別に発表する機会があった[4]。そこで当セミナーでは、そのうちの一つパリ日仏協会に注目する。

当協会に関しては、その「会報(Bulletin)」の総目次をまとめたパトリック・ベイユヴェール（Patrick BEILLEVAIRE）が次のように書いている。

「この会報を読むことにより、この協会の学術的・社交的な活動を知ることができる。この団体は 500 人以上の会員を擁し、そのなかには日仏問わず多数の重要人物が含まれる。今日では忘れられた極めて些細な出来事の記述から、30 年間の日仏関係を垣間見ることができる。」[5]

従来の日仏交流史の研究では、かつて両国間を行き来した先達の伝記的研究[6]やある専門分野に限り、どちらかといえばその影響を一方通行に限定したものが多いように思われる。具体的に言えばフランスでは日本の浮世絵に関心が高まり、その影響を受けて印象派といわれる芸術家の集団が現われた[7]。あるいは明治維新以後に近代国家建設を急いだ日本はヨーロッパの科学や技術を導入するため、来日するフランス人や留学する日本人がいた[8]。それら先人のいわば「弟子」達による研究や、学会創立〇周年誌など専門家グループ内の記念碑的記録で完結しているように思われる[9]。

また近年の日本では、フランスを含めた海外の日本人の「言語都市」や心象の研究から、かつて外国の都市を訪問あるいは滞在した日本人の記述に関心が向けられているが、対象は同時期の外国における日本人同士の人間関係に限定されている[10]。

学協会の歴史を扱ったものにはアルフレッド・フィエロ（Alfred FIERRO）の研究がある。フランス国立図書館に勤めていたフィエロはパリ地理学協会の歴史に関する博士論文の中

---

[4] 第 9 回フランス日本研究学会 2010 年 12 月 17 日，演題　« La relation franco-japonaise avant la Deuxième Guerre mondiale à travers des sociétés franco-japonaises »
Japon Pluriel IX として Picquier 社より刊行予定。
[5] BEILLEVAIRE, Patrick : *Le Japon en langue française,* Editions Kimé, 1993, Introduction.
[6] 例えば日本では、西堀昭：『日仏文化交流史の研究』，駿河台出版社，1981 年.
大久保泰甫：『日本近代法の父　ボワソナード』，岩波新書（黄版）33，1977 年.
柴田依子：『俳句のジャポニスム　クーシューと日仏文化交流』、角川叢書　2010 年.
またフランスでは、POLAK, Christian. *Soie et lumières,* Tokyo, Chambre de Commerce et d'Industrie Française du Japon, 2001.
Idem. *Sabre et pinceau*, Tokyo, Chambre de Commerce et d'Industrie Française du Japon, 2005.
THIEBAUD, Jean-Marie. *La présence française au Japon.* Paris, l'Harmattan, 2008.
[7] 馬渕明子：『ジャポニスム』，ブリュッケ，1997 年.
ジャポニスム学会：『ジャポニスム入門』，思文閣出版，2000 年.
[8] 三浦信孝：『近代日本と仏蘭西』，大修館書店，2004 年.
[9] 宇佐美斉：『日仏交感の近代』，京都大学学術出版会，2006 年.
[10] 和田博文：『言語都市・パリ』，藤原書店，2002 年.
和田博文：『パリ・日本人の心象地図』，藤原書店，2004 年.

で、学協会の活動を左右するものとして、会員、予算、事業の 3 点を挙げている[11]。

以上より、本稿では日仏関係史を考察する序章として、20 世紀初頭 30 年間に刊行された「会報」を主なよりどころとして、パリ日仏協会の性格を会員及び事業の一環として発行された「会報」を通じて明らかにすることを目的とする。協会は誰を会員として、何をしたのか。そして 30 年の間に変化は見られるのかを検討したい。

２　在仏日本人組織、パンテオン会との関係

本セミナーは明治期を対象としているので、まずは協会発足時に関して 1 章を設ける。筆者は二国間組織のパリ日仏協会の設立期調査に際し、同時期に存在したパリにおける純日本人組織としてのパンテオン会に関心を持った。この前世紀初頭に結成されたパリ在住日本人留学生の集まりについては、近年その回覧雑誌の復刻とともに研究が出版されている[12]。

またパリ日仏協会には 30 年間に亘って発行された「会報(Bulletin)」とは別に、草創期に「年報(Annuaire)」が 2 号刊行されていたことがわかった[13]。日本の図書館で両者が一緒に所蔵されていることも想像されるが、日本の国立情報学研究所並びに国立国会図書館の目録には「年報」は見当たらない。そこでパリ日仏協会側のいわば公式の記録である「年報　第 1 号(Annuaire n° 1)」と日本人留学生側の日記などに基づく既存研究を対照してみたい。

規約（Statuts）第 1 条によれば、「パリ日仏協会は、芸術家、実業家、商人、愛好家、研究者などの様々な日本に関心を持つ人々のあらゆる質問を扱う場所である。日本におけるフランス人居住者や旅行者、またフランスにおける日本人に対して研究や事業のために必要な援助を与えることで、協会は日本人とフランス人の間の社会的関係の発展に寄与する。」

しかしこの目的に反して、フランス在住の日本人全てから協会の設立が歓迎されていたのではないことが手塚恵美子の研究[14]で明らかになった。手塚は「パンテオン雑誌」の記事や当時在仏の日本人留学生、黒田清輝や箕作元八の日記から「会員らは時に、共通の問題を共に考え解決するために一致団結することもあった」として、一部の日本人とパリ日仏

---

[11] FIERRO, Alfred : *La société de géographie 1821-1946*, Librairie Droz, 1983, p.241.
[12] 『パンテオン会雑誌』研究会：『パリ一九〇〇年・日本人留学生の交遊』，ブリュッケ，2004 年.
[13] 1902 年以降に「会報」の発行が始まってからも、年に 1 度は表紙もしくは標題紙が「会報（年報）Bulletin (Annuaire)」を名乗り、規約や会員名簿、また総会の記録が掲載されている。
[14] 手塚恵美子：パンテオン会の軌跡―会員たちの記録、日記、回顧録、書簡等より，『パンテオン会雑誌』研究会編：『パリ一九〇〇年・日本人留学生の交遊』，ブリュッケ，2004 年，pp. 367-390.

協会の紛議を推測している。

手塚論文は 1900 年 11 月 10 日の箕作元八の日記を引用する。

「昨日は今度新しくできた和仏会というに招かれたけれども、評判面白からずして行かざりし。竹内栖鳳、久保田米斎の二氏等に席画を書かしめ、池部［辺］義象及び博覧会茶店の某女に花を生けしむることをなしながち［ママ］、交渉不十分にて、竹内氏のごときはおおいに感情を害し、席画を謝絶し、米斎氏一人強姦的に揮毫せしめられしよし。これは周旋人が食い物にするつもりなりしゆえ、人々のしゃくにさわりし。塚本、和田、小生、樋口も行かざりしなり。」

ここで言う「和仏会」を手塚はパリ日仏協会としているが、筆者はパリ日仏協会の「年報第 1 号」の中に、この箕作日記の記述をほぼ裏付ける久保田の墨絵 2 点があるのを発見したのでここに掲載する（図 1）。作品写真下の説明の内容は次のようである。

「1900 年 11 月 8 日に催されたパリ日仏協会発足の夜会に際し、クボタ氏によって数分のうちに描かれた墨絵（高さ 0 メートル 74 センチ×幅 1 メートル 06 センチ）」

この「年報　第 1 号」には、1902 年 2 月 3 日に開催された総会においての事務局長による報告(Rapport du secrétaire général)も掲載されており、この夜会は次のように語られている。

「1900 年 11 月、書店サークル(Cercle de la Librairie)のサロンが提供されて、ルヴォン(Revon)氏の『日本のいけばな』についての講演があった。日本人男女が共演し、観客の前で講師の説明を実演して、素敵な花が生けられた。

その晩の集いには日本人画家ふたりも参加した。大きな紙に一本の細い筆で描かれる席画を参会者は堪能することができたのである。作品は協会にて大切に保存されている。

カワキタ氏より浮世絵と掛け物が出席者の数人に贈られた。我々はこの贈物には感謝の言葉もなく、夜会は盛況のうちに幕を閉じた。」[15]

ここで「年報　第 1 号」に掲載された 1900、1901、1902 年の会員名簿[16]から各年の新入会員を見てみる（図 2）。また入会年毎に日本人名を整理すると表 1 のようになる。1900 年入会者のうちパンテオン会会員は林忠正ひとりである。林は「パンテオン会雑誌」に執筆したことはなく、日本人留学生グループとは一線を画していたと思われるが、日本美術収集家を多く含んだパリ日仏協会に参加することは美術商としての交友、あるいは思惑も

[15] *Annuaire de la Société franco-japonaise de Paris*, n° 1, 1902, p. 17.
[16] *Annuaire de la Société franco-japonaise de Paris*, n° 1, 1902, pp. 9-12.

あったと考えられる。

日本人の在仏外交官や日本在住者を加えても、日本人とフランス人（フランス人以外も含むことは以下参照）のアンバランスは避けられず、そこでパリの日本人留学生に声がかかったと考えるのは道理であろう。1900 年 11 月の前述の夜会の後、1901 年にパンテオン会員[17]から大挙して 12 人入会している。席画を披露した久保田米斎をはじめ、箕作日記で設立夜会に欠席したとされる和田英作と樋口勘次郎も名を連ねている。なお 1901 年夏に箕作元八自身はロンドンへ、塚本靖もベルリンへ移動している。また竹内栖鳳は以後 30 年間にわたる会員名簿にも登場することはない。

翌 1902 年は政府関係の駐仏日本人が 4 人加わったに過ぎない。手塚が指摘するように「留学生に国際交流の役割を担わせようとする日仏双方の官側に対して、留学生側が反発」をして、新設の友好協会に対して在仏日本人の足並みがそろわなかったのは容易に想像できる。

３　会員

30 年にわたる会報にはほぼ毎年会員名簿が掲載された。図 3 は種類別会員数の変遷を示したものである。会員は規約により「通常会員（membre annuel）」「自由会員（membre libre）」「終身会員（membre à vie）」「賛助会員（membre donateur）」「名誉会員（membre d'honneur）」に分けられた[18]。

新たに会員になるには、会員二人の紹介と理事会での承認が必要であり、年会費を納めるものが「通常会員」で一度に多額の会費を納めると「終身会員」になれた。「自由会員」は「報道関係者など、協会に有益な者に与えられる資格である」[19]とあり、会費金額については触れられていない。事実、一般紙や美術雑誌の編集者や記者がこの資格で会員になっている。

規約第５条には「女性も会員となれる」とある。女性一人での参加は少なかったが、有力

[17] 前掲手塚論文によれば「パンテオン会は、［中略］、少なくとも明治末年頃までは続いていた」とあるが、「パンテオン会雑誌」第Ⅰ～Ⅲ号（1901～1903 年）に関係の深い会員は 54 人を数える。

[18] 規約に定められた会費は次表のとおり

	１９０３年	１９１３年	１９２３年	１９３１年
賛助会員	300 フラン以上	300 フラン以上	300 フラン以上	500 フラン以上
終身会員	100 フラン	150 フラン	150 フラン	300 フラン
通常会員（年）	15 フラン	15 フラン	20 フラン	30 フラン

[19] 規約第 4 条。

会員の夫人や未亡人、また場合によっては娘の名前が名簿には見受けられる[20]。

30 年間に刊行された会員名簿から 1045 人の個人名[21]が見つかった。その 4 分の 1 にあたる 285 人は日本名である。図 4 は日本人名とそれ以外の名前の数の移り変りを示している。前章で触れた草創期を除けば、各時代とも日本人の割合は 20 から 24%と変化ない。会員総数は「会報」の刊行が止まる 10 年前、1922 年に 540 人と最大に達する。

図 5 は会員名簿掲載の会員住所により、その分布を示したものである。パリ在住の会員が大半を占めている。とりわけパリ万博を契機に発足した協会という背景から、当初はパリ市内 73%，その郊外を含めれば 8 割近くがパリに集中していた。それが少しずつ分散していく。その一因は次に見る会員の職業構成に負うところも多いと考えられる。会員の多くを占めた外交官と軍人は任地を次々に変えていった。前者でいえば日仏間を往復、あるいは第三国に赴任するなど世界中を移動した。軍人も駐在武官として相手国に赴任するほか、国内の異動もあり、そのため時間と共にパリ一極集中が薄れていった。

1923 年 4 月 1 日にはリヨンにて日仏デー（Une journée franco-japonaise）が催され、それを契機に 20 人ほどのリヨン在住者が会員として加わった。

図 6 は同じく名簿から会員の職業を調べたものである。会員名簿には会員の種類と住所は必ず記載されているが、職業については空白で不明の場合も 215 人（21%）を数えた。前述のように夫婦で会員の場合は女性の職業はほとんど空欄である。

設立後しばらくすると次第に軍人と外交官が主流を占めてくる。とりわけ初期は日本の美術工芸品の収集家を多数会員に含んでいたことが類推されることを考慮すると、単なる職業だけでは入会の動機を明らかにできない場合がある。例えば、医師、法律家、銀行家、実業家といった富裕階層が職業上の関心から会員でいたのか、個人的趣味から入会したのかを明らかにするのは、著名な収集家を除けば困難だからである。

1912 年 7 月に設立された日仏銀行に所属する会員は 1913 年に 6 人、1923 年に 11 人を数える。行員のほとんどが会員ということも考えられる。同様に 1920 年代になると、パリの三菱など日系の大企業が会員の所属先として見られるようになる。協会支援のひとつの形として、日本への興味の有無にかかわらずフランス人職員であっても社員即会員ということがあったことも容易に想像できる。

---

[20] 例えばソシエテ・ジェネラル（銀行）の名誉会長と「ルヴュ・デ・ボザール（Revue des Beaux-Arts）」誌の評論家であったヴァレ（VALET）父娘。

[21] 個人名とは別に 19 の施設会員がいた。その中にはアメリカのニューヨーク・パブリック・ライブラリーと大学図書館２館、ロンドンのヴィクトリア・アルバート博物館図書館等の会報購読を目的としたと推察される研究施設と、エア・リキッドや日仏銀行等の協会の財政面を支援したと思われる日仏企業に分類できる。

以上、国籍の取得などを考慮せず名前のみで「日本人」とそれ以外を大まかにフランス人と見なしてきたが、両国人以外としてロンドンの日本協会（Japan Society）の幹部アーサー・ディオシー（Arthur DIOSY）、日本美術収集家のロシア海軍士官セルゲイ・キタイエフ（Serge KITAEFF）、駐仏ペルシャ公使サマド・カーン（SAMAD KHAN）などもパリ日仏協会の会員であった。

また第三国の研究者として、ニューヨークのブルックリン美術館の民族学者スチュアート・キューリン(Stewart CULIN)、ベルギーの王立自然史博物館のエルネスト・ヴァン・デン・ブルック(Ernest van den BROEK)、ドイツのハンブルク美術工芸博物館のユストウス・ブリンクマン(Justus BRINCKMANN)なども会員名簿に名を連ねている。

これらの日本人やフランス人以外の会員の存在は、彼らの日本への関心の一端にフランス、そしてこのパリ日仏協会が影響を与えていることを、そして彼らが自国の日本研究に影響を与えたことを考慮すると看過できない。

さて 30 年間に及ぶ会員名簿を見てみると、会員層の変遷は明らかである。当初は名誉会長のギュスターヴ・ボワソナード（Gustave BOISSONNADE DE FONTARABIE）や初代会長のルイ＝エミール・ベルタン（Louis Emile BERTIN）といった明治政府のお雇い外国人や日本美術の収集家のジークフリート・ビング（Siegfried BING）やエミール・ギメ（Emile GUIMET）、アンリ・ヴェヴェール（Henri VEVER）などを会員としていたが、しだいに「ジュルナル・デ・エコノミスト（Journal des économistes）」誌を主宰したイヴ・ギヨ（Yves GUYOT）や「レコノミスト・フランセ（L’économiste français）」誌を創刊した経済学者で下院議員も務めたポール・ルロワ＝ボーリュウ（Paul LEROY-BEAULIEU）、アルベール・メーボン（Albert MAYBON）やフェリシアン・シャレイ（Félicien CHALLAYE）に代表されるジャーナリストが入会する。この会員層の変化は次章で取り上げる「会報」の内容にも変化をもたらすことになる。

４「パリ日仏協会会報」

1900 年秋に設立されたパリ日仏協会の「会報（Bulletin）」第 1 号の表紙には「1903」、標題紙には「Ⅰ - 1902」と書かれている。標題紙裏には「1902 年の集会（Réunions de l’Année 1902）」とあり、12 月 16 日の午餐会まで書かれていることから、発行はその後と考えられる。

1902 年 2 月 3 日の総会での会長挨拶でルイ＝エミール・ベルタンは「芸術研究は継続的な動きを起こさなければ成果をもたらさないのであるから、協会理事会の関心はできるだ

け早く会報を定期的に発行するようになることである。」[22]と発言している。

翌年の 1903 年 2 月 25 日の総会時に事務局長報告が「本日発行の会報第 1 号を皆様方に配布できますことは幸甚である」[23]と明言しており、創刊がわかる。

図 7 は会報発行の変遷を示したものである。刊行頻度は最も高い 1907 から 09 年、1921 から 22 年に 3 ヶ月毎の年 4 号の時代があり、1915 年や 25 年など頻度が「0.5」となった年は、その単年で会報が 1 号も出なかったことを意味する。1932 年に 74 号を発行したことまでが確認されている。

同様に年間の総ページ数の変化も示しており、1 年間で 700 ページを越えたときもあれば、100 ページを割ることもあった。

この変動の説明はひとつには社会情勢に求められる。1914 年からの減少は第 1 次世界大戦に起因するものである。しかし協会内の事情も無視できない。会報の出版担当者は各号の末尾に「Le Gérant」として記名されている。会報担当は協会活動の鍵を握った人物と思われるが、会報に掲載された追悼記事などから、歴代担当者の少なくとも 2 人の在任中の死亡が確認されている。1907 年フェリックス・レガメー（Félix REGAMEY）、1917 年にはエドム・アルカムボー（Edme　ARCAMBEAU）が他界して、その前後で会報発行は停滞している。

また 1924 年 10 月に会長のルイ＝エミール・ベルタン、11 月に会計のアンリ・シュヴァリエ（Henri CHEVALIER）、事務局長補佐の翌 1 月にはシャルル・アレヴェック（Charles ALEVEQUE）と幹部 3 人の死去が相次いだ。会長の死後に書記局長フェルナン・スアール（Fernand SOUHART）が会長に昇格したため、空席となった事務局長にはフランス極東学院（Ecole Française d'Extrême-Orient）の院長経験も持つクロード＝ウジェヌ・メートル（Claude-Eugène MAÎTRE）が就任するが、メートルも就任後数週間して他界した。遅れて 62 から 66 号の合併号として出版された会報は、追悼記事であふれた。

歴代会報発行担当者の 8 人は次の通り。

画家であり、協会の事務局長を務めたフェリックス・レガメー

語学教師で協会の司書兼文書係を務めたエドム・アルカムボー

当時の会報の印刷を請け負っていたアンジェにある印刷会社の社長のテベール（A.

[22] *Annuaire de la Société franco-japonaise de Paris*, n°1, 1902, p. 15.
[23] *Annuaire de la Société franco-japonaise de Paris*, n°2, avril 1903, p. 19.

THEBERT）

技術者で協会の理事であったウジェヌ・ルメール（Eugène LEMAIRE）

外交官で 1914 から 23 年まで協会事務局長、1924 年以降会長職を務めたフェルナン・スアール

軍艦の建造技師として日本に招かれた後、協会初代会長をつとめたルイ＝エミール・ベルタン

外交官で 1928 年から副会長を務めたエドゥアール・クラヴリー（Edouard CLAVERY）

1926 年に会報を担当したオズ（M. AUZOUY）については不明。会員名簿にもこの名前は出てこない。

図 8 は 30 年間の主な会報記事の変遷である。

凡例を上から順番に説明すると「即売会情報」は、アジアの美術工芸品のオークションの結果の報告である。

例えば「1924 年 10 月 20 日から 23 日まで、オテル・ドゥルオ（Hôtel Drouot）の 10 号室において、シャルル・アヴィラン（Charles HAVILAND）の収集品の 15 回目の即売が行なわれた。写楽の市川団十郎：5800 フラン、、、木製の蛇の根付：1100 フラン、、、」[24]

「政治」「経済」「植民地」といった主題の記事は日本の国力が充実してくるにつれて増えていく。

「浮世絵」と「古武具」はレイモン・ケクラン（Raymond KOECHLIN）とエドゥアール・メヌ（Edouard MENE）というフランス有数の収集家が大部分の記事を寄稿している。

2 回の天皇崩御は、それぞれ巻頭で伝えられた。とりわけ明治天皇については 40 ページ以上の記事が寄せられている。それに対して大正天皇の場合は数ページの追悼記事というのは対照的である。昭和天皇の皇太子時代の訪欧に際しては協会の歓迎行事も報告されている。

「書評」とは日本関係の図書の紹介で、ほぼ毎号一貫して掲載されていたものである。執筆は会報担当者であることが多い。1912 年のように「書評」だけで 100 ページ近くが費やされたころもあった。

[24] *Bulletin de la Société franco-japonaise de Paris*, nos.62-66, 1924-1925, p. 109.

前章で見た会員層の変遷を裏付けるように、芸術記事が減少して、社会科学関係記事の増加している。

５　むすびにかえて

以上、日仏関係史研究の序説として、まず創設期のパリ日仏協会と日本人留学生の間にあった「紛議」を協会側資料で裏付けた。また公刊された「会報」に基づき、会員や協会事業としての「会報」の内容を検討した。

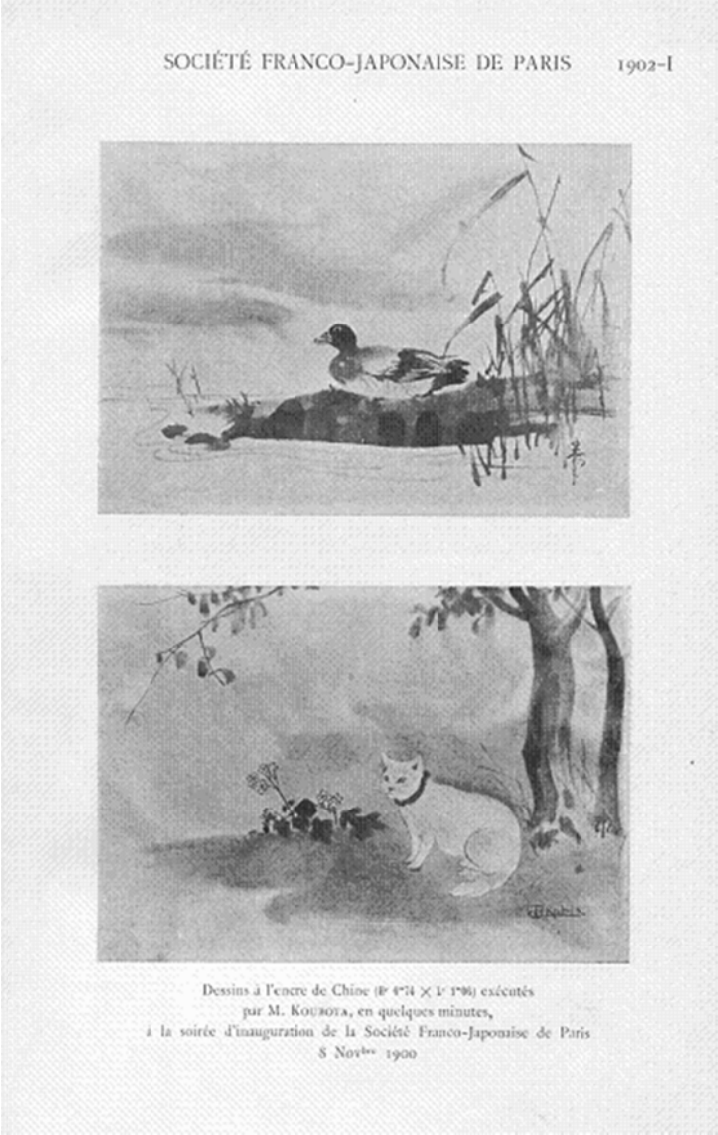
会員や「会報」掲載記事の芸術から社会科学への変遷は、20 世紀初頭におけるフランスの日本に対する興味一般を直に反映しているものと思われる。この 30 年、元号で言えば明治、大正、昭和を経て、フランスにとって日本は、単なる美術工芸品を生み出す国、あるいは西洋科学や近代技術を一方的に移転する国ではなく、パートナーでありライヴァルへと変わっていった。

今後の課題として、冒頭で述べた既往の個人史的研究は、各専門分野の二国間の交流史の礎になるべきだと筆者は考えている。日仏間で同時代に相手国へ興味を持ち、あるいは行き来した人々、例えば、日本美術に関心を持ったフランス人芸術家とフランス科学に関心を持った日本人技術者というように、分野も国籍も違う人々の間に、関係はあったのか。そして専門を超えた交流がパリ日仏協会という枠組みのなかに存在したのかを明らかにしていきたいと考えている。

また開国・維新以来、近代国家建設の過程で日本が交流を持った国はフランスに限らない。パリ日仏協会とも往来のあったロンドンの日本協会をはじめ、その他の欧米諸国、またフランスにあったほかのアジア諸国との交流団体との比較も、日仏関係の特質をより明らかにしてくれると思われる。

図１　久保田米斎による席画

(*Annuaire de la Société franco-japonaise de Paris*, n°　1)


SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE PARIS 1902-I

Dessins à l'encre de Chine (0m 4°74 × 1m 1°96) exécutés
par M. KOUBOTA, en quelques minutes,
à la soirée d'inauguration de la Société Franco-Japonaise de Paris
8 Novbre 1900

図２　パリ日仏協会草創期の新入会員

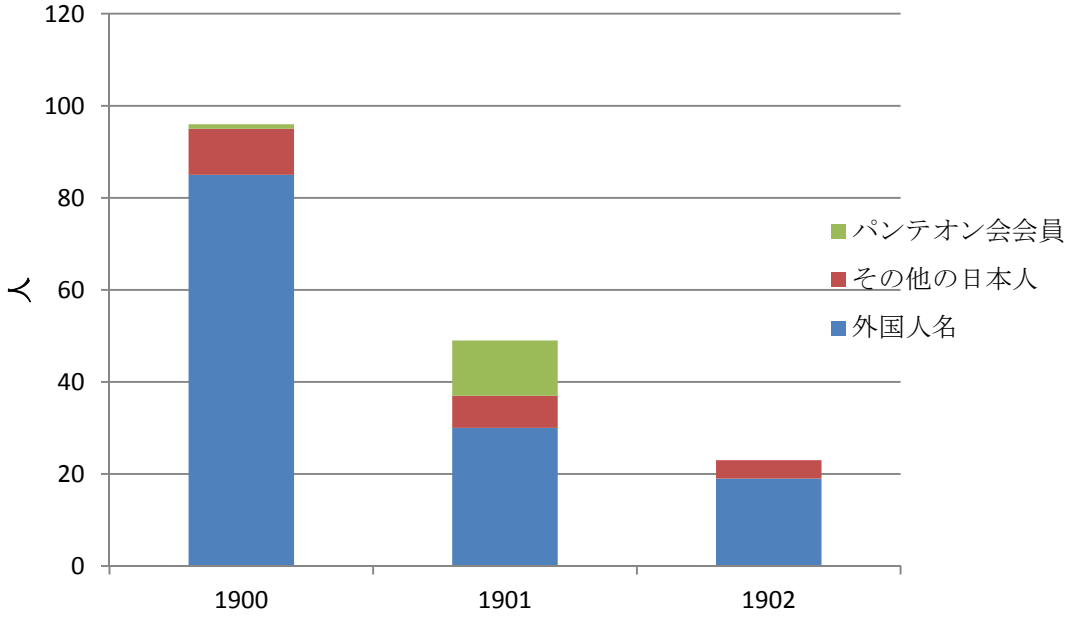


表１　パリ日仏協会の日本人　漢字名の「*」はパンテオン会会員

名前	種類	住所	漢字名
1900 年　入会			
ADATCI	V	7, avenue de la Grande-Armée	安達峯一郎
AKIDZUKI	V	A la Légation du Japon, à St-Pétersbourg	秋月左都夫
HAYASHI	V	65, rue de la Victoire	*林忠正
HIRAYAMA	H	A Tokio. – Chambre des Pairs	平山成信
KURINO	V	A la Légation du Japon, à St-Pétersbourg	栗野慎一郎
MINISTRE DU JAPON	H	75, avenue Marceau	駐仏日本公使
MITSISUKE KAWAKITA	H	Au Japon	河北道介
NANGASAKI	H	65, rue de la Victoire	長崎千里
NISHIO	V	65, rue de la Victoire	西尾卓郎
SOUWA	A	57, avenue Malakoff	諏訪秀三郎
TAWADA	A	Garnison Japonaise à Shanghaï	
1901 年　入会			
ASAI	A	58, avenue Malakoff	*浅井忠
HIGOUTCHI (Kanjiro)	A	43, rue des Ecoles	*樋口勘次郎
ISHIVARA	A	Verrières-le-Buisson (Seine-et-Oise)	*石原助熊
KOTARO SHIDA	A	A Tokio. – Ecole supre de Commerce	*志田鉀太郎
KOUBOTA BEICAI	A	12, rue de Provence	*久保田米斎
MAKAMAROU	A	Au Japon	
MATOUDAIRA (Cte.Yositchika)	V	Palais Impérial à Tokio	松平義周 義生の初名
OKADA (S.)	A	Au Japon	*岡田三郎助
SHIGUENO	V	4, rue de l'Abbé-de-l'Epée	*重野紹一郎
SHIMIDZOU	A	Consulat japonais, à Montréal	*清水潤之助
SOUZOUKI	A	57, rue de Bourgogne	

TAKENO-OUTCHI	V	10 *bis*, avenue de la Grande-Armée	竹内平太郎
TANAKA	A	Chez le ministre de la Maison Imple, Tokio	
TATSOUABOURO-YABE (Dr.)	A	Ecole navale de Médecine, Tokio	*矢部辰三郎
TATSOUKE	A	9, rue Galilée	田付七太
TERASHIMA (Cte)	V	44, rue Sainte-Placide	*寺島誠一郎
WADA (Eisakio)	A	9, rue Toullier	*和田英作
WATANABE	A	A Tokio	
YAMADA (Sabouro)	V	Faculté de Droit, à Tokio	*山田三良
1902 年　入会			
AKASHI (Colonel)	V	26, avenue du Trocadéro	明石元次郎
INOUYE	V	3, rue Richer	井上金治郎
OYAMADA SENTARO	L	Ministère de la Marine, Tokio	小山田詮太郎
TAKEDA	V	43, rue de Galilée.	武田秀雄

図３　パリ日仏協会会員数の変遷

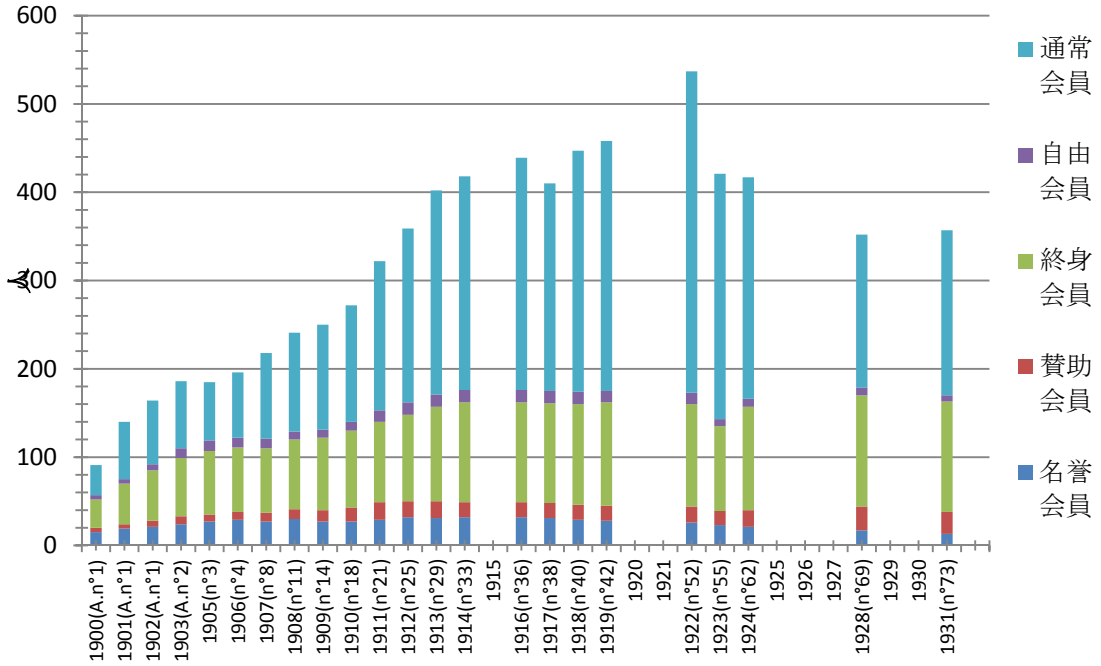


図４　会員名簿における日本人名

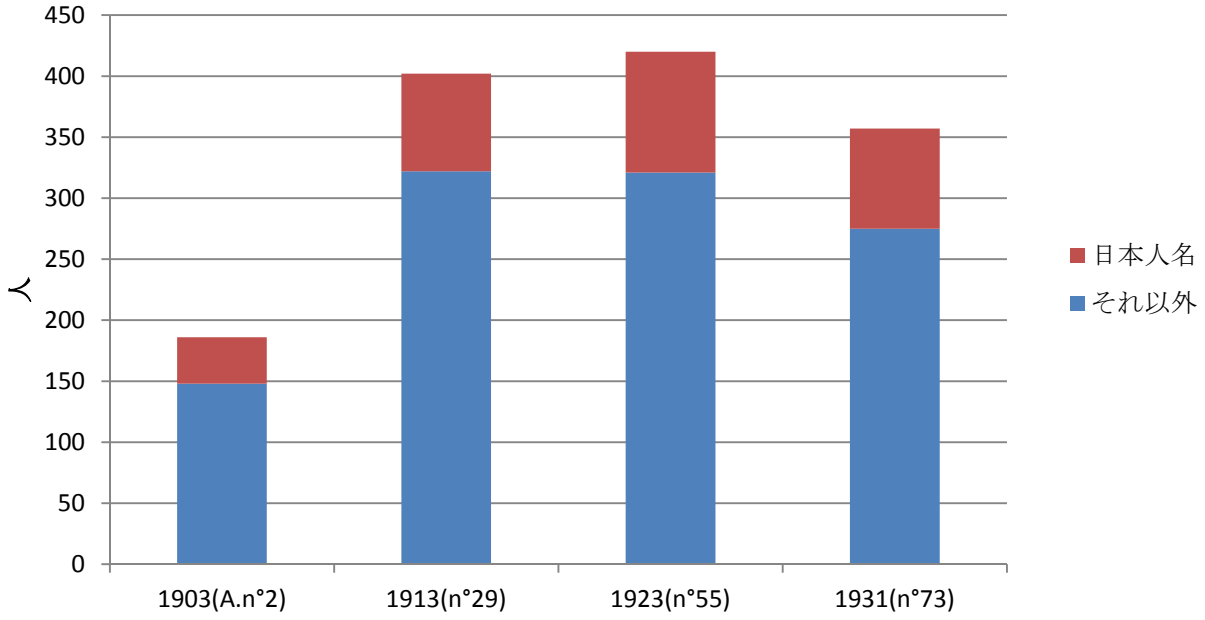


図５　パリ日仏協会会員の地理的分布

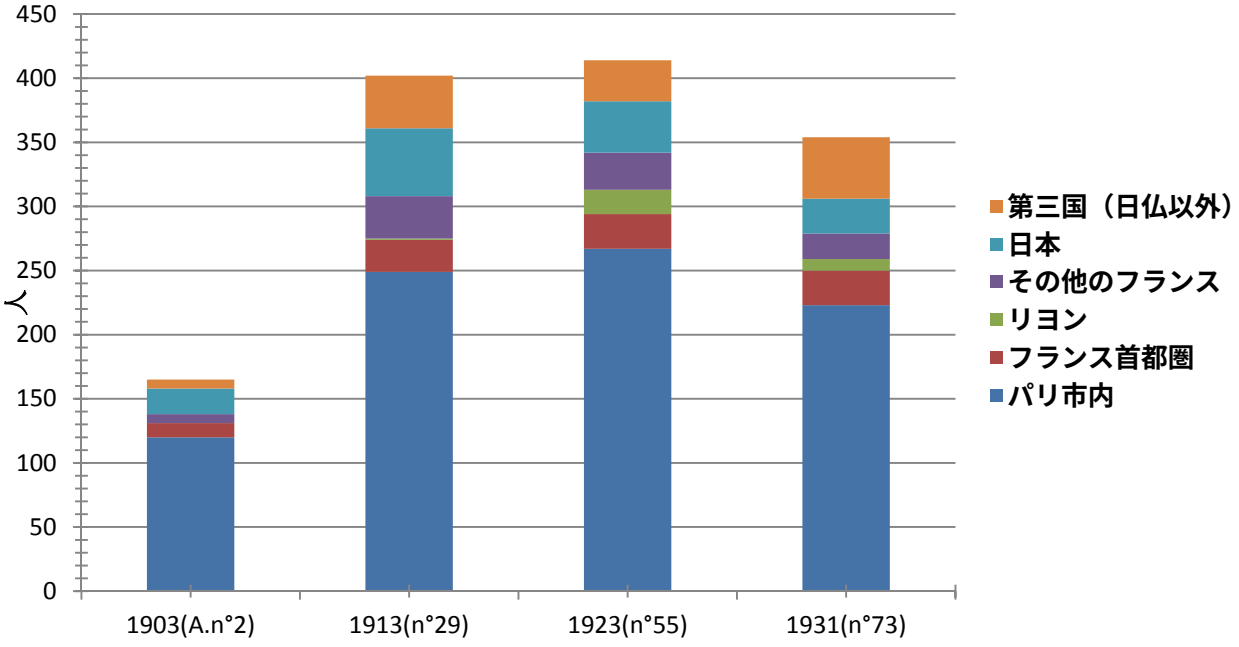


図６　パリ日仏協会会員の主な職業区分（判明分）

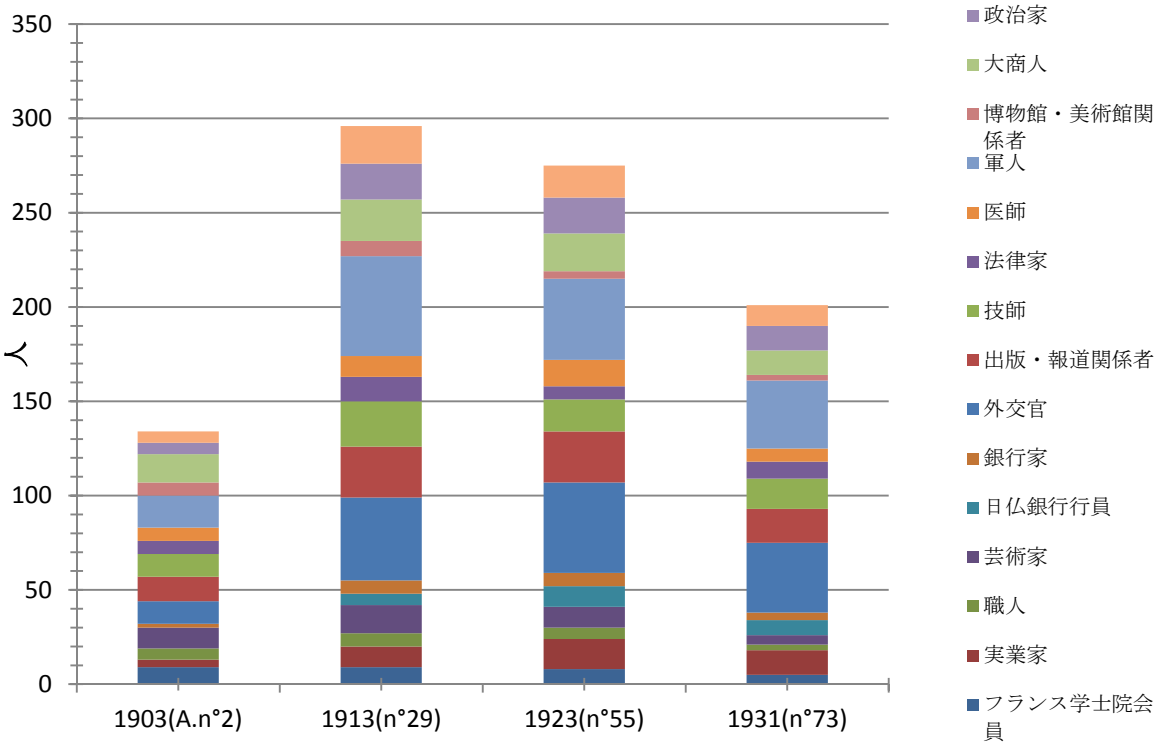
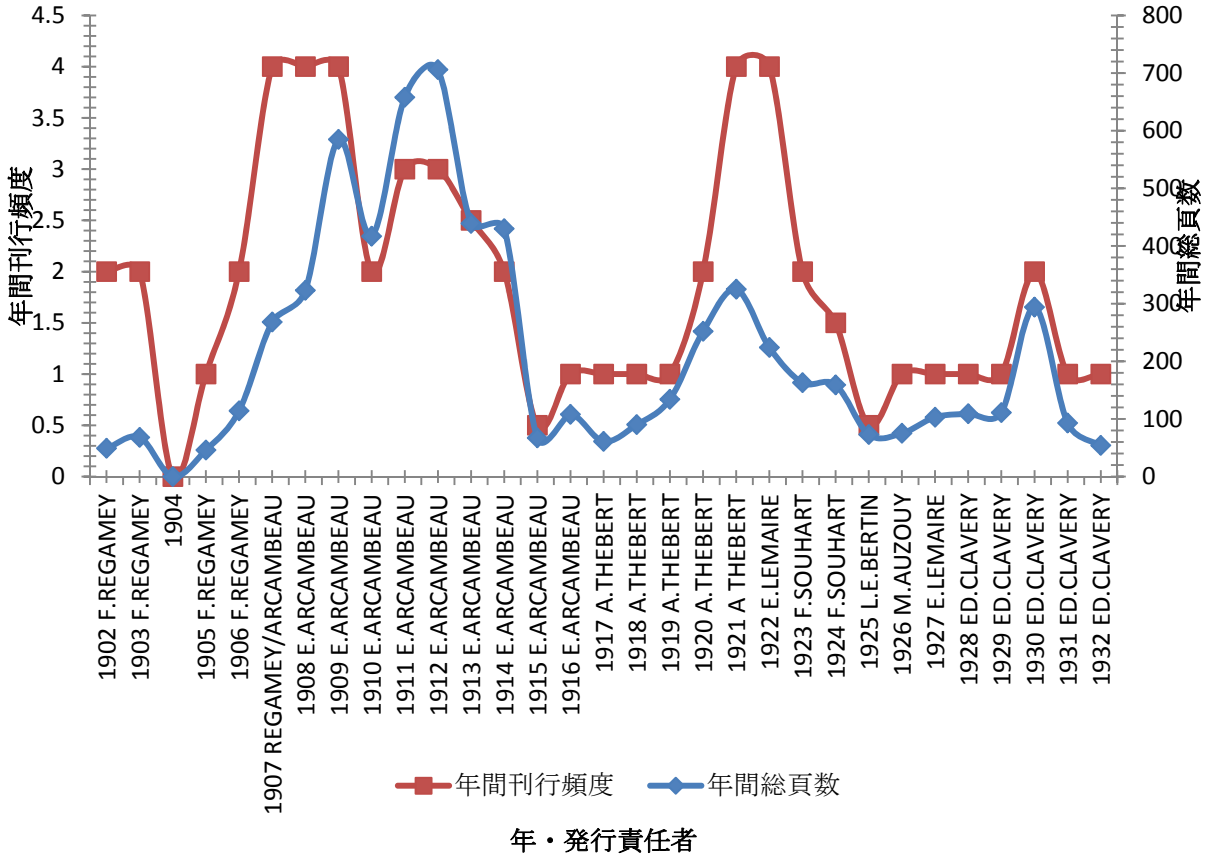


図７　「パリ日仏協会会報」


年間刊行頻度
年間総頁数
4.5
4
3.5
3
2.5
2
1.5
1
0.5
0
800
700
600
500
400
300
200
100
0
1902 F.REGAMEY
1903 F.REGAMEY
1904
1905 F.REGAMEY
1906 F.REGAMEY
1907 REGAMEY/ARCAMBEAU
1908 E.ARCAMBEAU
1909 E.ARCAMBEAU
1910 E.ARCAMBEAU
1911 E.ARCAMBEAU
1912 E.ARCAMBEAU
1913 E.ARCAMBEAU
1914 E.ARCAMBEAU
1915 E.ARCAMBEAU
1916 E.ARCAMBEAU
1917 A.THEBERT
1918 A.THEBERT
1919 A.THEBERT
1920 A.THEBERT
1921 A THEBERT
1922 E.LEMAIRE
1923 F.SOUHART
1924 F.SOUHART
1925 L.E.BERTIN
1926 M.AUZOUY
1927 E.LEMAIRE
1928 ED.CLAVERY
1929 ED.CLAVERY
1930 ED.CLAVERY
1931 ED.CLAVERY
1932 ED.CLAVERY
年間刊行頻度
年間総頁数
年・発行責任者

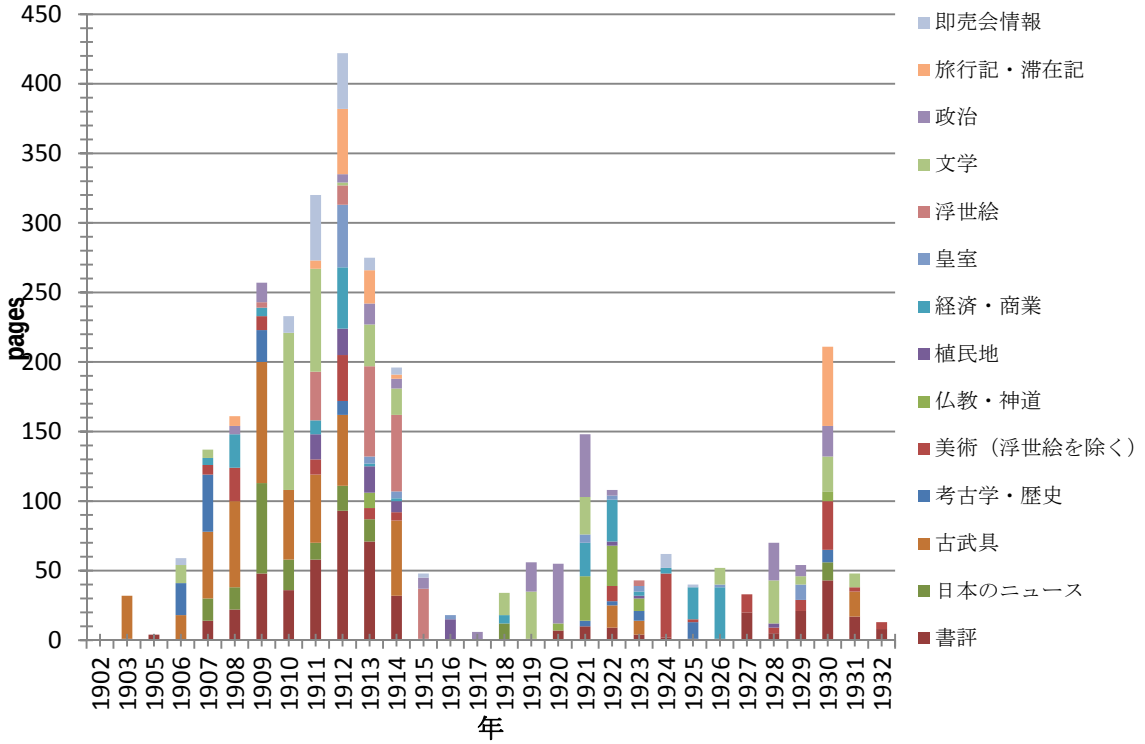



図８　「会報」掲載記事の主な内容